

舞台は集合団地内にある公園。

地面には子供らが遊んでいたのか様々な模様（円や長方形、楕円など）が大きく描かれている。傾いた鉄柱にはラッパスピーカーが備え付けてある。

舞台奥には団地の白い壁がある。

舞台の外、両側には椅子がいくつか置かれ、以下に登場するクロス隊と朗読者（男女）は、登場の後はそこに待機する。

誰もいない。

舞台上にクロスが数名現れ足音を立てながら整列を始める。

やがて朗読者（男女）が現れ舞台外側に置かれた椅子に座り、朗読を始める。

プロローグ

以下の文章を朗読する。

その朗読にあわせ数名のクロスが動く。その動きは地面に書かれた模様によって規則付けられる。

朗読（女） エピソード①豊岡さん。

E号棟四のbに住む豊岡真由美さんは薄く口ひげが生えていた。頭もよく責任感もあつた。運動会が近づくある日。クラスでは薄い和紙を使って飾り用の赤い花と白い花をつくっていた。万事器用な豊岡さんはたちまち自分の割り当てぶんはつくってしまい、まだできていない人に教えることになった。彼女の机の前に不器用なやつらが並ぶ。その行列の中に「牛」がいた。G号棟六のaに住む浜野かおるは口元がゆるくいつもよだれをたらし、ゆえにあだ名は「牛」だった。彼の

母は朝が弱くゴミの回収に間に合わないことが多々あった。そんな時彼の母はベランダにゴミを置いておく。ご近所の評判は悪く彼の母はこう呼ばれていた「牝牛」。豊岡さんは行列の中に浜野を見つけ、しだいに混乱を始める。一度浜野の机の中からカビの生えたレーズンパンが見つかりそれを見た豊岡さんはその後給食を食べられなくなったことがある。あと三人、あと二人、と「牛」が近づくにつれ豊岡さんは青いカビの生えたレーズンパンを思い出す。ついに浜野が目の前に来たとき豊岡さんは吐いてしまう。豊岡さんの母は地球環境の保全と自然食品にこだわる人だった。彼女はおかず一日三十品目を心がけていた。ゆえに豊岡さんの吐いたものはさまざままで色合いも多彩だった。その日から豊岡さんは「万華鏡」

というあだ名をつけられ、やがて転校してしまう。

朗読（男） エピソード②クッキー。

B号棟五のaに住む金田のおばさんは仏教系の新興宗教に入っていて、毎日昼過ぎになるとご近所の信者さんを集めポンポン太鼓をたたいていた。そのお隣のB号棟五のbに住む柿原のおばさんはキリスト教系の新興宗教に入っていて、同じく昼過ぎになると負けてなるかのご近所にパンフレットを配る。柿原のおばさんは同じB号棟に住む石井のおばさん、新田のおばさん、J号棟六のbに住む葦原のおばさんを信者にする。それを知った金田のおばさんはA号棟一のaに住む佐々木のおばさん、F号棟四のbに住む米田のおばさん、C号棟三のaに住む石原のおばさんを信者に。柿原のおばさんは自慢の手作りクッキーをパンフレットに添えて団地中を歩く。G号棟で一人、E号棟で二人ゲット。クッキーは評判がよく柿原のおばさんは手書きのレシピを作成。さらに毎週水・金・土午後三時より自宅にてお茶会を開催。クッキー・スフレ・イチゴのタルトでおもてなしをしつつ着実にゲット。金田グループも巻き返しを図るが、「太鼓たたいてみませんか」

ではクッキーにはかなわない。クリスマスが終わって、柿原さんちは静まり返る。

旦那さんが子供をつれて実家に帰ってしまったのだ。お茶会は中断。信者さんたちも柿原のおばさんには近づかなくなる。一ヶ月ほどして金田のおばさんが自慢の筑前煮をもって柿原さんちのインターホンを押す。中からでてきた柿原のおばさんは「ありがとう。ありがとう」と五回以上繰り返し中に引っ込む。器は返してもらえなかった。

朗読(女)

エピソード③青い星。

C号棟四のbに住む大西さん一家は娘ばかりの六人姉妹。その三女大西さちえさんは夏になると青い星を見つめて眠る。大西さんの父親は夜の十時を過ぎて帰宅する。父は母にひとつ約束させている。「おれが帰って来るまでに必ず娘たちを寝かせておけ」。母はその約束を守るため夜の九時になると娘たちを寢床にせかす。寝ろと言われれば眠れない。六人の娘たちの目がさえる。耳を澄ませば上の階のテレビの音がかすかに聞こえる。一日遊んで疲れてはいるけれど足元のほうからボーっと熱が上がってくるようでなかなか寝付けない。母は怒る。「お姉ちゃんたち、何とかしなさい」。そこで長女が考え出したことが九時半までに寝ないとクーラーを消してしまう作戦。効果はテキメンだった。夏に六人で雑魚寝するのは辛い。クーラーを消されてはとても寝付くことはできない。娘たちは寝ることに集中する。さちえさんは一番寝つきが悪く、集中するとますます目がさえるたちだ。仕方なく彼女はクーラーの青いスイッチをじっと見詰めていた。周りでは姉妹たちが寝息を立て始める。さちえさんの目がさえる。青い星が消される時間になると長女が小さな声でさちえさんに声をかける。「さちえごめんね」。さちえさんは「うん」とだけ答える。長女がクーラーのスイッチを消すとさちえさんはベランダに近くに移動して風に当たる。あまりに寝苦しい夜はこっそりベランダに出て外を見る。公園の中央に立つ塔の下、二人がけのベンチに、その二人はいた。

朗読(男)

エピソード④ロメオとジュリエット。

A号棟一のaに住む中野信夫とG号棟四のbに住む沢井かづえは夜毎ベンチに来て話をする。内容は信夫の恋愛相談。夜の八時から十時ごろまで、夏には団扇と

虫除けをもって、冬には自販機で買ったコーンスープを飲みながら。信夫の恋の悩みはつきない。どんな些細なことでも信夫を悩ませる。「どう思う」と信夫はかづえに聞く。かづえが何を答えても信夫は「でもな」で切り返し、結局かづえの話など聞いちやいないのだ。夜の密会は団地の噂にもなって誰もが二人が付き合ってると思っていた。そんな噂を聞くと信夫は「なんでやねん」と怒り出し、かづえは「ちがうよ」と笑って答える。けれど二人はお似合いだった。たいしてかっこよくもない信夫とたいしてかわいくもないかづえは、ほほえましいカップルに見えた。でもやっぱり信夫は自分の話しかしなかった。最後までかづえの話は聞かなかった。

かづえのお葬式が終わって信夫は一人ベンチにやってきた。

舞台上に学生服をきた青年（信夫）現れる。

舞台上に置かれたベンチをじっと見る。

朗読（男） 十五分ほど黙って立っていた。

舞台奥の団地の白壁にビデオプロジェクターが映る。

「プロジェクター」 今回はこの二人の話をする。

青年（信夫）退場。

ビデオプロジェクターで団地の生活を写した写真がいくつも映し出される。様々な「生活の音」が流される。コロスたちは地面に書かれた模様規則付けられながら、様々な生活者を演じる。

場所・高校のグラウンド。

時間・八月の初旬・午前十一時。大勢の高校生が手に赤白のボードをもって「人文字」の練習をしている。

そのなかに教師コスギと信夫とクラスメートの勝頼がいる。

ヘリコプターの近づく音。

コスギ お、来た来た。西校V!

コスギは慌てて全員にボードを
頭上上げるように指示する。

コスギ ノブ! (信夫をたたく)

信夫 あ、(ボードを裏返す)

コスギ 動くな! 動くなよ!

ヘリからの声 光化学スモッグ注意報が発令されております。ただいまこの地域に光化学スモッグ注意報が発令されております。屋外にいる人は屋内に退避してください。繰り返し返します。光化学…。

ヘリは遠ざかる。

コスギ はい。下ろせー、はい下ろしてー。

信夫 先生。

コスギ ん?

信夫 注意報やで、

コスギ ガッツガッツ。

信夫 チカチカしてきた。

コスギ すぐ終わる。

勝頼 っていうかこれで倒れたら責任とってくれるんですか？

コスギ いい思い出になるだろ。(全体に向かって) ころー！ 女子、動くな！

コスギは遠くへ行ってしまふ。

信夫 はりきってるな。

勝頼 死ぬな。

信夫 え？

勝頼 コスオ。

信夫 ああ、血管切れそうやもんな。

勝頼 借金ひどいんやろ。

信夫 らしいね。

勝頼 新婚なのにね。

信夫 たまらんよな。

勝頼 でもま、順番だからね。

信夫 へ？

勝頼 順番に死んでいくから。

信夫 …全然意味がないよ。こんなこと。

コスギが戻ってくる。

コスギ 西校！ V！

生徒たちはボードを上げる。

コスギ 高く！（トランシーバーで屋上にいる教頭に連絡をとる）教頭先生聞こえます
でしょうか、こちらグラウンドのコスギです。はい、はい…

そのままコスギは遠くに行く。

信夫 むかつくー。

勝頼 どうだっていいじゃん。

信夫 腹たつやんけ。

勝頼 どうだっていいよ。

信夫 …これ、Vか？

勝頼 Vだろ。

信夫 Vか…。

勝頼 Vの先のほう。俺ら。

信夫 むかつくー。

勝頼 （大声で）バキナ！

信夫 は？

勝頼 バキナ！

信夫 何言ってるねん。

勝頼 バキナのV！

信夫は笑う。

勝頼 （冷たく）なにが面白いの？

信夫 …べつに。

コスオの笛の音が遠くで聞こえる。生徒たちはボードを下ろす。

信夫 でもさ、よく結婚できるよな。借金あるのに。

勝頼 あるからこそとか思ってたもうねんて。

信夫 どういうこと？

勝頼 知らん。

信夫 支え合ってたか思うんかな？

勝頼 知らん。コスオの嫁さん知ってる？

信夫 ああ写真でみた。

勝頼 いつ？

信夫 四月ぐらい。

勝頼 結婚前？

信夫 たぶん。

勝頼 どう？

信夫 え？

勝頼 チンコレーダーは反応した？

信夫 ああめっちゃ美人やった。

勝頼 (小声で) 激太り。

信夫 うそ！

コスギがやって来て笛を吹く。

コスギ 西校！ V！

生徒たちはボードを上げる。

コスギ 動くな、動くなよ！

信夫 どうだっていいやん。

コスギ (トランシーバーで教頭に) こちらグラントのコスギです。教頭先生いかがでし

ようか…、(以下小声)

信夫 帰らして、先生、帰らしてーや。

コスギ (トランシーバーに) はいわかりました。

信夫 帰らして。

コスギ そんなこと言うなよ。もうすぐへり来るから。

信夫 ぜんぜん俺ら関係ないやん。

コスギ もうちよつと、な。

勝頼 僕は別にいいですよ、

コスギ ほら、な、

勝頼 どうせ死にますから。

コスギ …そんなこと言うなよ。

へりコプターの爆音が響く。

コスギ え？ え？

コスギは慌てて笛を吹く。

コスギ 西校！ V！ はい上げて！ へり来たよ！ 上げて！ 写真来るよ！

生徒たちはボードを上げる。

へりからの声 光化学スモッグ警報が発令されております。ただいまこの地域に光化学スモッグ警報が発令されております。屋外にいる人は直ちに屋内に退避してください。繰り返します。光化学…、

へりは遠ざかる。

生徒たちはボードを下げる。

コスギ あれ？

信夫 先生！

コスギ そんなこと言うなって、な。(全体に) ころー！ 二年！ 動くな！ もー。

コスギは遠くに行ってしまう。

信夫 妊娠じゃないの？

勝頼 何から何まで太いもん。

信夫 えー、

勝頼 腕とかこんなん。

信夫 見たの？

勝頼 うん。駅前コスオと二人で歩いてた。デブデブ。

信夫 きつつー、

勝頼 たまらんよな。

信夫 意味ないやん。全然意味がない。

勝頼 ああ。

信夫と勝頼 (あまりの暑さに) …死ぬ…。

信夫 あれ？ (周りを見渡す)

勝頼 うん？

信夫 沢井、いない。

コスギが戻ってくる。

コスギ (朦朧としつつ) えー、警報ってことだね。ちょっと死にそうなんですけど、野球部出場決定。みんなでVってことだね。チカチカってして、くらくらってなったら、舌もつれてもう駄目だって人も、あと十分、十分の辛抱です。これが僕らの甲子園と思っただけだったら、ヘリのほう来ますんで、それで釈放されるまで、もうちょっとそのまま。

コスギはそう言うなりしやがみ込んでしまう。

信夫 大丈夫ですか？

コスギはかがんだまま動かない。

勝頼 俺教師にだけはなりたくないな。

コスギ …、

信夫 ほんとに来るのかよ。

勝頼 地方版なんてさのせることないもん。毎年恒例だから。

信夫 来るの？

勝頼 知らない。

コスギはかなり体調が悪いようで、肩で息をしている。

信夫 大丈夫ですか？

勝頼 先生。奥さん元気ですか？

コスギ …、

勝頼 いいな。あんな美人の奥さんがいて、家に帰るのが楽しみでしょ？

コスギ おっさんか、お前は、(トランシバーがなつて) はい。グラントのコスギです。はい。二年の、後列、はい、すぐ並ばせます。(全体に) ころら！ うしろ！

コスギは遠くに行ってしまう。

勝頼 しょうもな。

信夫 お前…、

勝頼 うん？

信夫 …。野球部も大変やな。

勝頼 いい思い出つてやつだろ。

信夫 甲子園。夢か。そのままプロ目指したりして。

勝頼 …。他人事だろ。

信夫 うん。他人事。

勝頼 私は一個の他者である。

信夫 は？

勝頼 いいなお前は、

信夫 え？

勝頼 頭悪くて。

信夫 うるせーな。

遠くでコスギが生徒を頼み込むようにして列に並ばせている。

信夫と勝頼はそれを見る。

勝頼 (コスギを見つつ) しょうもない人生か、

信夫 …

勝頼 馬鹿が。

信夫 おい。

勝頼 うん？

信夫 お前自分のこと頭いいとか思ってたのか？

勝頼 は？

信夫 人のことをな、あほって言うやつがあほやねんぞ。

勝頼 …あほ。

信夫 違う！ あほ違う。

勝頼 なに？

信夫 しょうもないとか言うな。

勝頼 だってしょうもないやん。

信夫 なんかあるねん。楽しいことがあるねん。生きがいがあるの。

勝頼 あるのかな。

信夫 あるよ。コスオはコスオなりにいろいろあるの。だいたいお前すぐ死ぬとか言いすぎ、そんな簡単なものじゃないから連発するな。

勝頼 しょうもない人生はあるよ。

信夫 ない。なんか生きがいがあるの。

勝頼 ないって。

信夫 ある。絶対にある。

コスギがトランシーバーでやり取りをしつつこちらに来る。

コスギ (トランシーバーに) はい。わかっております。はい。注意します。いえいえ、

とんでもない。はい。では、後ほど…。(切る)

勝頼 先生！

コスギ うん？

勝頼 先生って生きがいとかありますか？

コスギ …、あるわけねーだろそんなの。

へりの爆音が近づく

コスギ おお！ 来たよ！ へり来たへり、(笛を吹く) はいV！ ビクトリーのV！ は
い笑って写真あっち、ビクトリーのV！ ビクトリーの… (以下は爆音でかき消され
る)

生徒たちはボードを上げる。

舞台溶暗。

〔プロジェクター〕 G号棟四のbに住む沢井かづえはそのとき。

車の急ブレーキの音と鈍い衝突音。

〔プロジェクター〕 車に轢かれて死んでいた。

舞台上でクロス数名が「沢井かづえ」となつてうつぶせに倒れる。

〔プロジェクター〕 死んで、あるきまわった。

「沢井かづえ」は静かに動き始める。

朗読（女）

午前十一時五十二分。彼女の心臓は止まる。体調の不良を理由に学校をはや引きした沢井さんはその帰り道、団地の入り口でトラックと正面衝突する。即死だった。コンクリートに打ち付けられ後頭部を強打し、その時に脳内で出血したのだ。けれど女の死因について今も絶えない噂がある。コンクリートに打ち付けられた際、その衝撃により頭全体の皮膚が後ろに引きずられ、顔の皮膚も二十センチほど上にずれ、そのため息ができなくなったとの噂。何故そのような噂が広まったのか。それは彼女の遺体が収容されたのが、トラックに轢かれた現場から百メートル離れた団地の中央にあるベンチの手前であったからだ。時間は十二時を過ぎていた。つまり彼女は脳内に出血し心臓が止まった後も、三十分ほど団地の中を歩き回っていたのだ。そしてその姿は多くの人に目撃されている。

「沢井かづえ」は砕けたひざを引きづって歩き始める。

さらに数名のコロスが以下の朗読にあわせて動く。

朗読（男）

E号棟六のaに住む梶川明美はパートに出かける途中だった。急ブレーキの音も衝撃の鈍い音も彼女は聞いていなかった。パートに遅れそうだったのだ。今年で五歳になる彼女の息子は幼稚園が苦手だった。発育も遅く特に言語の発達が他の子供に比べて際立って遅れていた。毎朝息子を幼稚園に送り出すことが一番の仕事で息子は黙ってただ行きたくないと訴える。その日は特にひどく結局息子は幼稚園に行かなかった。仕方なく彼女は息子に留守番をさせパートに行くことにした。ガスの元栓を締め、窓をすべて閉めた。息子は座り込んでやはり何も言わない。梶川明美は靴をはきながら涙を流した。「ビデオ見てるのよ」。それでも息子は何も言わない。しばらく息子を見詰め。

梶川明美は走り出す。そして立ち上がり歩き出したばかりの沢井さんとすれ違う。梶川明美の目に沢井さんが映った。けれど梶川明美はなんとも思わずパートに急いだ。

「沢井かづえ」は歩き続ける。

舞台の別の場所でサカナと呼ばれる少女が静かに歩いて現れる。

SCC③ トリの話① (歩行)

暗い中、サカナは一人歩行する。

サカナはここがどこなのかわからない。ただ静かに歩行している。

サカナの姿がはつきりするにつれ、「沢井かづえ」は見えなくなつてゆく。

録音された母の音がラッパスピーカーから流れる。

母の声 サカナ。体の中に水があるの。声を出さずに自分の体に耳を傾けなさい。水の音がするはずだから。でもサカナ、その水が少しでも濁っていたら何も見えない。水をきれいにするには歩行することが大切よ。ゆっくり、ゆっくり。体の中にある水をこぼさないように、波が立たないように、ゆっくり歩行するの。静かにゆっくり歩行するのよ。

サカナ。輪郭線ってわかるわよね。モノには形があるの。あなたにも形がある。自分の形を思い浮かべなさい。自分がどんな形をしているか。そして目を閉じなさい。

サカナ歩きつつ目を閉じる。

母の声 まぶたの裏に、まだ自分の形がみえるでしょ。歩かせてみて…止まって…座つて

…笑つて…泣かせましょう。どう面白いでしょう。サカナ。今度は私のことを考えてみて、私の形。憶えているところからいいの。私の指先。頭の形。両肩。目。まぶた。

ほっぺた。鼻。口。眉毛。歯。腕。着ていた服。はいていた靴下。目を閉じて。

サカナは目を閉じる。

母の声

ほら私が見えるでしょ。さあ。お話ししましょう。

そのとき「ガチャ」と音がする。

サカナは歩行を中断しそちらを見る。

そこには金属のドアがあり老人（イトクズ）がトリカゴのようなものをもって立っている。照明が広がるとそこは団地の一室である。

「ムー」というモーターの振動するような音がずっと響いている。空気は青く、水槽の底のようにも見える。部屋にはカセットテープが山積みされている。しばし二人は互いを観察するように見詰めあう。

老人（イトクズ）の手にしたトリカゴの中にはトリがいて大きく鳴き声をあげる。

サカナはおどろく。

イトクズ トリだ。

サカナが近づく。トリが鳴く。

SE「雑踏」が流れ込んでくる。

イトクズとサカナの姿がかき消される。

SC④ 残された男

ここはヒラカタの駅前。

二十歳になった信夫が車にもたれ人を待っている。

しばらくすると勝頼が駅ビルから現れる。

二人は車に乗り込む。

信夫 どう。大学は。

勝頼 普通だけど。

信夫 普通じゃわからんだろ。

勝頼 だって普通だもん。

信夫 ふーん。

信夫は浪人二年目。

勝頼は大学二回生になっている。

信夫 いつまでこっちにいるんじや。

勝頼 八日ぐらいまでかな。

信夫 そんだけ？

勝頼 うん。

信夫 同窓会、九日がいまんとこ有力なんだけど。

勝頼 あ、そう。

信夫 東京組が帰ってくるの遅いんだよ。柴田と川上が九日に帰ってきて、

勝頼 なに東京組って？

信夫 だから柴田とか川上、鶴野、東京行ったやつらだよ。

勝頼 いいよ同窓会とか。

信夫 とにかく九日までいろよ。

勝頼 なんで。

信夫 いいから。

勝頼 …どうでもいいけど。

信夫 一年に一回ぐらいな。

二人は黙り込む。

信夫 どう。最近は。

勝頼 普通だって。

黙り込む。

勝頼 お前はどうかなの？

信夫 タクシーだよ。

勝頼 え？

信夫 おとついは安原と釜本おくって、昨日は古賀送って。

勝頼 何やってんだよ。

信夫 お前だってそうだろうが。

勝頼 予備校は？

信夫 うるせーな。総理大臣ってどこにいるの？

沈黙。

勝頼 総理官邸。

信夫 電話番号知ってる？

勝頼 は？

信夫 いや。直接電話したほうが早いと思って。

勝頼 (笑いながら) は？

信夫 いや。テレビとかでき、ガタガタ言うより、本人にさ。

勝頼 (笑いながら) は？

信夫 いや、俺も選挙権もらったし、いろいろ考えるわけよ。

勝頼 (笑う)

信夫 教えてあげたいじゃん。あなた今こんな風に思われてますよって。

勝頼 総理大臣に？

信夫 余計なお世話かな。

勝頼 お前勉強しろよ。

信夫 うるせーな。

勝頼 大丈夫か？

信夫 何が。

勝頼 一人暮らししたほうがいいぞ。

信夫 うるせーな。

二人はしばし黙って運転を続ける。

信夫 どう。彼女はできた？

勝頼 できたけど別れた。

信夫 うそだ。

勝頼 何が？

信夫 え？いつ別れたの？

勝頼 今年の春かな。大学のチアの子で、

信夫 (びっくりして) チア？

勝頼 チアリーダー。

信夫 知ってるよ。

勝頼 三ヶ月ぐらいで別れたかな。

信夫 もっちねー（もったいないの意）。なんで別れたの？

勝頼 性格合わなくて。

信夫 関係ないだろ性格なんて。

勝頼 …は？

信夫 いや、わからんけど。

沈黙。

勝頼 でも今、付き合いかけのコいるから。

信夫 え？

勝頼 前の彼女の友達ですげー話もあうから。

信夫 チア？

勝頼 チア。チアはいいよ、体柔らかくて。

信夫 …。どうやって知り合ったの？

勝頼と信夫 合コン。

勝頼 そう。合コン。

信夫 うそだ。

勝頼 なんでもうそつくの。

沈黙。

信夫 合コンの成功率ってのはだいたいどのくらいなの？

勝頼 は？

信夫 だから飲んだ後の問題。

勝頼 そりゃ気合によるけど、

信夫 「まんまん」で。

勝頼 「まんまん」だったら、どうだろう。

信夫 だいたいいいから。

勝頼 女の子のほうもしたがってるからね。

沈黙。

信夫 へー。

勝頼 (信夫に顔を寄せ) すごいー女の性欲って。みんなでお酒飲むだろ。そしたら露骨に動かせーんってアピールするやつがいるわけ。トイレの前でしゃがみこんだりしてき。お金があつたらそのままホテルに連れて行けばいいし、なければ自分の部屋につれて帰ればいいし、だから、気合まんまんなら百パーやれるんじゃないかな。ああ、爪だけはきれいにしとけよ。

沈黙。

信夫 あれとるな。

沈黙。

勝頼 洗濯機がうるさいから見に来てくれってのもあつたな。

信夫 は？

勝頼 いや夜中にね。洗濯機がうるさいから見に来てくれって電話がかかってくるわけよ。

信夫 はあ、

勝頼 で、行ったら。もう梅酒飲んでるわけ、タンクトップで。で、そうなるし。

信夫 …

勝頼 さびしいもんだよ。一人暮らして。

沈黙。

信夫 洗濯機は大丈夫だったのか？

勝頼 ただの入れすぎだよ。

信夫 へー。

勝頼 まあ全部が全部そうってわけじゃないけどさ。

信夫 そりゃそうだ。

勝頼 でもマグロの回遊みたいなものかな。

信夫 は？

勝頼 だからマグロはさ、海辺で捕まえようとしても無理だろ、かと言って外海に出てもただむやみに網はってたってマグロはとれない。マグロはマグロで群れをつくって決まったコースをぐるぐるまわってるわけよ。

信夫 なんの話？

勝頼 やらしてくれる子だよ。やらしてくれる子もマグロといっしょで群れをつくって決められたコースをまわっているわけ。捕まえたのならそのコースの上をいって網をはって待っていればいい。いくらでも捕まえることができる。

信夫 …。かわったな。お前。

勝頼 一人暮らししろよ。

信夫 うそついてるのか？

勝頼 心配してるんだよ。お前のこと。

信夫 気軽に言うなよ。

勝頼 家出すればいいじゃないか。

信夫 一人っ子だって。

勝頼 関係ないよ。

車は団地の駐車場に来る。

二人は車をおりる。

夜の団地には何千世帯もの明かりがともっている。

二人は感慨深げにそれを見る。

信夫 大学って、エッチやのー。

勝頼は口を開くが言葉はプロジェクターで流される。

「プロジェクター」 勝頼・「俺はな。怪獣になるよ。怪獣になってこのうっとうしい建物を破壊してやるんだ」

二人は別れる。

信夫は家に帰る。

その食卓には母と風呂上がりの父が夕刊を読んでいる。

「プロジェクター」 母・「おかえり。ごはんは？」

「プロジェクター」 信夫・「うん」

「プロジェクター」 父・「どこいった」

「プロジェクター」 信夫・「駅前」

「プロジェクター」 父・「ごはんは？」

「プロジェクター」 信夫・「は？」

「プロジェクター」 母・「だから食べるっていつてるやないの」

「プロジェクター」 父・「ほら」

「プロジェクター」 (といって父は信夫にビールを注ぐ)

「プロジェクター」 信夫・「あのさ。おれ、家出したい」

朗読にあわせてクロスたちが動く。

朗読（男）

B号棟三のbに住む福本かおりは、それを見て初めなんなのかわからなかった。強烈なブレーキの音も後に続く衝突音も聞いていた、けれどそのことと目の前に現れた「顔の不自由な人」とがうまくつながらなかった。そう、沢井さんを見たとき最初福本かおりは「あ、イタ」と思った。失礼のないようにうまく無視することを心がけようと笑顔を準備する。B号棟三のbに住む福本かおりは信用金庫に勤めている。窓口にいるとこぶのある人、あざのある人、上唇の裂けた人、いろいろやってくる。失礼のないように無視をすることは福本かおりにはお手の物だった。けれどほんの2・3秒たつて次第に近づくにつれだんだんはつきり見えてくる。血で真っ黒に染まった服、頭の皮ごと剥けて肩の辺りにぶら下がった髪、碎けて歩きたびにこりこり音がするひざ。福本かおりの中で先に聞いた音と目の前の「痛い人」とがつながり始める。笑顔がこわばり始める。あと何メートルかですれ違う。「そうか助かったんだな」福本かおりはそう思った。ものすごい音がしたからきつと即死か重体で動けないだろうと思っていたけど、よかった助かったんだ。きつと今日はそういう日なんだ。こんなに天気がよくて雲ひとつない日だもん。きつとそうだ。なんともなかったんだ。福本かおりはすれ違う時親しみをこめて言った。

「よかったですね」

彼女にはそれが聞こえていたのか？ 沢井さんは何かを求めるように手を上げた。

「沢井かづえ」は手を上げる。

その動きにあわせて舞台の別の場所でサカナとイトクズが現れ、サカナはトリカ

ゴに手をのばす。

SC⑥ 鳥の話②

■

モタの振動する音。

トリが鳴き、サカナは後ずさる。

イトクズ 食べてしまってもいいんだが、食べられるのかもわからない。それにこういうやつには「風のおい」が残っているからね。まあ、俺はどうせ年寄りだし。「風」なんて怖がつてちや何もできないけど。水をくれないか？

サカナは答えない。

仕方なくイトクズは自分で水を探し始める。

イトクズ 好奇心を抑えられなくてね。私の住んでいた町で生き残ったのは私だけだ。何が起ったのか、これからどうなるのか、もちろん誰もわからない。そのうち三人の男が私のところにやって来た。「風」をかいぐぐって…そんなことできるわけないんだけど、まあ勇気があるというか、おつちよこちよいな連中さ。「なにが起ったのか？」私が問う。「決定的なことだ」連中が答える。「これからどうなるのか？」「どうにもならない」連中が答える。それは正しいこと、正確な情報だった。連中はぱったり死んでしまったよ。これは連中からもらったものでね連中は「トリ」と呼んでいた。私も馬鹿でね。こうして旅をすることにしたんだ。

イトクズは部屋を眺める。

イトクズ　ここは「ハコ」だったんだね。懐かしい。私も昔「ハコ」に住んでいた。君みたいなお娘がいて。(水を発見し)　これいただくよ。

イトクズは水を飲む。

イトクズ　イトクズと呼ばれてる。きみは？

サカナは何も答えない。

イトクズはそこらにあるカセットテープをデッキに入れ再生してみる。

ラップスピーカーより声が流れる。

テープⅠ(父の声)　寒いときはその場に寝転びごろごろ転がるのが効果的だ。その際、

大声を出せばさらに効果は倍増する。「あ、あー」や「う、うー」などできるだけ意味がない、そのくせ攻撃的な声を出すことをお勧めする。サカナ、それでも寒いときは部屋のいたるところにいろんなものを置いて、その周りをぐるぐる回りなさい。けれど走ってはいけないよ。規則正しく息をすることがポイントで、少しだけ足早に歩けばいい。それでも寒いときは…、

イトクズはデッキを停止する。別のテープを再生する。

テープⅡ(母の声)　歯磨きはお仕事と思ってしまうことが大切です。お仕事を丁寧にする

ように歯磨きも丁寧にしなくてはならない。憶えておかなくてはいけないことは歯によって磨き方が違うこと。前歯は歯茎にブラシをあてて静かに振動させるように磨く。奥歯は歯と歯の間にブラシをあてて下の歯ならば上に向かって回転させ、上の歯ならば下に向かって回転させる。丁寧に、確認するように…、

別のテープを再生する。

テープⅢ（父の声）

…絡まりすぎたものは解けなくなってしばらくそのまま飛び続けるが、やがて死んでしまうだろう。その際メスは白っぽい半透明の液を出しオスは青と茶色のまじった固形物を吐き出す。サカナ、それに触つちや駄目だからね。テアカリカテアフルはテアカリミテアフルと違ってけっして仲良しとは言いがたい。その液と固形物に触ると、触れたところからだんだん…

別のテープ。

テープⅣ（父の声）

…靴ずれは床ずれよりはましたが女ずれよりはうれしいものじゃない…

別のテープ。

テープⅥ（母の声）

…それでもすべてを終わりにしたいときにはサカナ、その扉を開きなさい。

イトクズはテープを止めてサカナをじっと見る。

イトクズ　しゃべれるのか？

サカナは答えない。

イトクズ　サカナ。きみはしゃべることできるかい？

サカナは答えない。

イトクズ わかっていることを全部話そう。今、世界には人間と呼べるのは二人しかない。
い。私と、きみだ。

イトクズは話を続ける。

イトクズ 何千年も昔。世界は大やけどをおった。世界の皮膚はただれ、地上に吹く風も降り注ぐ光もそこに住む人間にとって毒になってしまったそうだ。やがて世界の皮膚の表面にカサブタが覆い始めた。カサブタは空を覆って人間はその内側にのがれそこで生活を始めた。人間は願った。いつかまた地上に住むことができようにと。気が遠くなるほどの時間が流れ、地上での生活の記憶などかけらもなくなった。そして吹き始めたんだよ。「風」が。

「風」は吹いた。

だが僕たちはすでにその「風」に耐えられる体ではなかったようだ。サカナ。きみはきみの家族がどこにいつてしまったか、知っているのかい？

サカナはイトクズのほうを見てはいるが何も答えない。

イトクズ サカナ。僕たちは捨てられたんだ。

イトクズは泣き崩れる。

舞台は暗くなる。

「プロジェクター」 父・「私の退職金はバリヤフリーと息子の家出につかわれた」

信夫が大きな荷物をもって寝たきりの祖母に話しかけている。

信夫 ばあちゃん、ばあちゃん。

祖母は目を開く右手で「いやいや」をするしぐさ。

信夫 俺行くから。

祖母は枕の下からティッシュにくるんだ一万円札を出す。

信夫 いや、いいって、いいから。

と、言いつつ信夫は受け取る。

信夫 住むとこきまったら連絡するし。

「プロジェクター」 祖母・「コウジくんか？」

信夫 いや、俺信夫。

祖母はまた一万円を出す。

信夫 いやいいよ、いいって、いい。

と言いつつ受け取る。

信夫 区切りがつかいたら帰ってくるつもりでいるし、ごめんなそばにいてやれんで、

〔プロジェクト〕 祖母・「コウジくんか？」

信夫 信夫やって、

〔プロジェクト〕 祖母・「きいつけや、カネモウケニシニヤマイ」

信夫 わかつてる。

〔プロジェクト〕 祖母・「だれや？」

信夫 のぶお。

〔プロジェクト〕 祖母・「だれかいるのか？」

信夫 の、ぶ、お。

〔プロジェクト〕 祖母・「コウジくんか？」

信夫 うん。コウジやで

〔プロジェクト〕 祖母・「のぶかいな」

祖母はまた一万円を出す。

信夫 いやもうもらったから、いって、もらった…

と言いつつもお金を受けとる。

信夫 じゃあ、

と信夫は部屋を出ようとするが、

〔プロジェクト〕 祖母・「ええかのぶ、人の話をよう聞いて、はいはいはいちゆうてき

き流してるねんで、カネモウケニシニヤマイ、人に足踏まれてさきにすんまへんちゆう

たほうが勝ちや。おじいさんはあほな人で、オサムが高校入った次の日に会社辞めてきはった。会社の人集まったら一升瓶買いに行かされてみっちゃんやらそれはずかしがつてな。うちの子らはみんな「アトホドヨウナルホツケノタイコ」やさかい、西陣のときかて暗いうちから夜まではたらいで、でもな、半月ごとなんや、十五円と十五円、それうちのおばあ知らんでな、おばあには十五円だけわたして、あとの十五円はうちがもろとった、赤い屋敷たてたるいうて、炭俵の炭かじってお金ためてはったけど、全部戦争や、石ころなつて帰ってきはった、いまは山科で階段もおりられへん。ええか、「カネモウケニシニヤマイ」「カネモウケニシニヤマイ」やで、ええな。

信夫 わかった。

信夫は部屋を出る。

SC⑧ 求める③ (悪夢は遺伝するか)

朗読にそってコロスたちが動く。

朗読(女) G号棟四のbに住む沢井良子は、沢井かづえの母である。

彼女はそのときベランダで洗濯物を干していた。ベランダから団地の入り口は見えない。ただ衝突の音だけは沢井良子の耳にも届いた。鈍い嫌な音だと思ったが手を休めることはなかった。不意に耳が遠くなる。それはよくあることだった。耳鼻科の医者になった友人に相談するとそれは鼓膜の内と外で気圧が違っているからだと言われた。心配することはないらしい。でもたいていは冬になるものだけど、沢井良子は少し心配になった。パン、パンと洗濯物をはたく音も聞こえない。が、大丈夫だろう、きつとすぐ治る。耳が聞こえないのもたまにはいいものだ。そう思うことにして洗濯物の続きに取り掛かる。沢井良子は昨夜のことを思った。夜中目を覚ますと娘が隣で泣いていた。そんなことは

初めてだった。どうしたのと聞いても何も答ええない。ただ泣き続けるだけだ。沢井良子はそのとき思い出した。自分も今の娘と同じ年のころ同じように夜に泣いたことが何度かあったことを。それは夢だった。眠るのが怖くなるぐらい恐ろしい夢だった。

少女沢井良子は汽車に乗っている。終点まで行かなくてはとあせっている。理由はよくわからない。汽車が終点についても線路はまだ続いていて、ここじゃ駄目だ、とキップを買い、また終点を目指す、ずっとずっとそれを繰り返す夢、その夢を何度か見て不眠症になりかけたことがあった。

悪夢は遺伝するのかしら。

沢井良子は「夢？」と聞いてみた。娘はうなづいた。どんな夢だったか聞こうとしてやめておいた。娘は一言だけ言った。

「プロジェクター」 「こわい」

朗読（女） 洗濯物を干す手が止まる。次第に周囲の音が聞こえ始める。電話が鳴っている。娘の声がうもれていく気がして、沢井良子は外に飛び出した。

電話の音「りりりりりり…」

SCC⑨ トリの話⑨

卍

「りりりりりり…」とタイマーの音がする。

イトクズは泣き崩れている。

「ガッチャ」とカセットが自動的にオンになり伸びきったテープからラジオ体操が流れてくる。それはあまりに古いテープなので音質は最悪。ところどころ途切れていたりする。

それでもサカナは体操を始める。

「プロジェクター」 「誰もいない世界で

私一人が体操をしている

怖くて仕方ないけれど

言葉を忘れてしまったようだ

「タスケテ」と、言えない」

イトクズ 風に吹かれた人間はぱったり死んでしまう。子供で一分。大人だと三分ほどで死んでしまう。何の痛みもない。体のあらゆる器官がゆっくり足並みをそろえて生きることをやめてしまうからだ。心もね。初めに不安が生じる。今しがた自分を吹き抜けていった「風」が、自分を少しすり減らしてしまったのではないか。たとえば「風」は何億という虫からできていてその虫が自分の体を少し食いちぎってしまったのではないか、その肉がもっていた記憶ごと奪っていつてしまったのではないか。そんな不安が襲ってくる。そして確認を始める。腕は腕らしくそこにあるか。耳は耳らしくそこにあるか。鼻は鼻らしく、指は指らしく、私は私らしくそこにあるか。私？ けれど私が私であるのは私の記憶をもっているからだ。そこで今度は自分の記憶を確認しはじめる。名前、住所、親のこと、最終学歴、妹の旦那、好きな食べ物、今朝の食事、昨日あったこと、二日前のこと、三日前のこと、一年前、二年前、もっと前、もっともつと前、川が流れていたこと、その川を工事していたこと、新しい河川敷でいつもの乞食がぼんやりしていたこと、乗っていた自転車、その前に乗っていた自転車、その前、もっと前、見ていたのは私だ。そこで見ていたのは私、だから、私の記憶にはいつも私の姿はない、私の姿だけはない。

あれ？

本当に私か？

で、終わり。子供だと一分。大人は三分。私は何分かかるだろうね。きみはどれくらい「両親のことを憶えている？」

しばらくここにいさせてもらおうよ。いいだろう。

体操を終えたサカナは再びトリカゴの中のトリにちよっかいを出し始める。

イトクズ 気をつけたほうがいい。牙をもってるかも知れない。

サカナはトリカゴからトリを出してやろうと試みる。

イトクズがサカナの手首をつかむ。

イトクズ 俺はな。女をさがしていたんだ。

SC⑩ 深夜の可能性

大阪の繁華街から少し離れたところにある牛井屋。

信夫はバイトをしている。

深夜の三時ごろ。

客は誰もいない。

信夫は掃除に励んでいる。

そこに浮浪者風の中年男性がやってくる。

信夫 いらっしやいませ！

それは変わり果てたコスギであった。

信夫はそれに気がつくがコスギは気づかない様子でカウンターにこしかける。

信夫 あちらで食券を…

コスギ (首をよこにふる)。あつーい、お茶。

信夫 …。

信夫はお茶を出す。

コスギは黙ってそれをすする。

仕方なしに信夫は掃除を再開する。

コスギ ちんぼくん。おい、ちんぼくん！

信夫 え？

コスギ きみにちんぼはないのか！

信夫 ありますけど、

コスギ ちんぼくん！

信夫 …はい。

コスギ なんやお前は。

信夫 すいません。

コスギ さよならを言いに来た。

信夫 え？

コスギは鞆の中から紙切れを出す。

コスギ これを読め。

信夫 (困惑する)

コスギ 読め！

信夫は読む。

信夫 …将来の夢。小杉コウジ。人間は月に行ったらしい。らしいというのは僕は見てな

いからだ。おばあちゃんが死んだのだ。僕は本家の長男なので一番目立つところに座って、テレビも見せてもらえなかったのだ。いっぱいいろんな人が来てモゴモゴしゃべっていたが、僕はひそかに宇宙飛行士になりたいと思っていたのだ。青い地球を見てみたいとかひそかにオモテいたのだ。うどん屋は苦勞が多いと母が言っていたので、僕は宇宙飛行士になろうと思う。

コスギは作文の朗読中ずっと笑っている。

コスギ きみは何歳や。

信夫 二十三です。

コスギ 大学生か。

信夫 フリーターです。

コスギ わかるか。こんなもんや。宇宙飛行士になんかなる気はなかったよ。ただ世の中が怖くてな。どうすれば無邪気な作文になるか、大人は喜びよるからな。わざと書いてるんや。嫌なガキや。(笑う)首絞めてガサゴソあさってたらこんなん出てきよった。

信夫 え？

コスギ ちんぽくん！ 人間はちんぽに始まってちんぽに終わるな。俺は自分の墓にはただ一言、ちんぽって書いてほしい！

信夫 笑われますよ。

コスギ 次はこれや。

コスギは再び紙を取り出す。

信夫は受け取る。

コスギ 読め！

信夫 …私が私であるために。小杉コウジ。

私が私であるために私は何をどうすればいいのだろう。

私が私であるために私は私を知らねばならない。

私は何がしたいのか？

私・私・私、私地獄。

セミならば二週間。

私は八十年。

どうにかしてくれ、この健康。

コスギは笑いながら聞いていたが最後に泣く。

コスギ わかるか？

信夫 なんとなく。

コスギ うそをつけ！

信夫 (小声で) どうでもいいですよ。

コスギ え？

信夫 わかります。

コスギ どんなふうにも？

信夫 最後の健康ってところが読んでて痛かったです。

コスギは信夫に握手をもとめる。

コスギ これが高校時代や、サザンオールスターズがデビューしたころでな、そのころは

勢いだけのバンドって感じで、今で言うところと爆風スランプみたいなもんかな。

信夫 古いですよ。

コスギ (とても力んで) ♪エリーマイラブ、ソスーイ。

信夫 酔ってるんですか？

コスギ そのころは山のぼりが好きでな。一人でこまごましたことを準備してる時間が何より好きで、何べんもリュックひっくり返して、また入れ直して、そんなことばかりしていたね。山はいいよ。

信夫 へー、

コスギ 人間がない。

信夫 そうですね。

コスギ でも違うのよね。いるのよ、「私」という人間が。

信夫 なんかつたんですか？

コスギ 俺、一人っ子やったからさ、こーゆうの残ってるわけよ。まさか残ってると思っ
てなかったからさ、おののいてるの。だってこっちは現金ほしくてあさってるのにさ。
こんなの出て来るにやもん。

信夫 へ？

コスギ これ読んでたら、何十年も前から、もうこうなることは必然やった気がしてさ。
ということはあいつらもこうなることぐらいわかってたんかも知れへん。俺を生んだと
きにもう覚悟してたのかも。なあどう思う？

信夫 …何を言っってはらはるんですか…。

外でパトカーの通り過ぎる音。

コスギ きみはいくつや。

信夫 二十三です。

コスギ 大学生か？

信夫 フリーターです。

コスギ どういう風に？

信夫 は？

コスギ どういう風にフリーなの？ なにがどうフリーなの？

信夫 …自由に職業を選べるんです。

コスギ へー。すごいねきみは。

信夫 なんなんですか。

コスギ 「なんなんですか」

信夫 やめてください。

コスギ 「やめてください」

信夫 やめろや。

コスギ 「やめろや」

信夫 しばくぞ！

コスギ 「しばくぞ」

信夫はコスギをなぐる。

コスギはカウンターから落ちる。

コスギ なんでこんなことになったんやろ。きっと何か足りないか、それかどこで何か無くしちゃったのか。いらんと思って捨てたガラクタの中に、すごく大事なものがあつたのよ。自分では全然気づいてないけど穴は開いてて、目をそらしたくてコダワリが生まれて、人にわかってもらえないと、すぐ逃げて、逃げて逃げて。でも逃げ切れないもんね。俺の場合。何やろ。俺は何を捨ててしまったんやろ。

コスギは独り言としてつぶやいてるのだが、信夫には自分に向けられたコトバのように感じられる。

信夫 もうほっといてくれ。

コスギ なんでこんなことになってん。なんでこんなことになってん。なんでこんなことになってん。なんでこんなことになっ…（くりかえす）

信夫 やめろ。やめろや。やめろ！

二人は同時にやめ、同時にため息をつく。

コスギ もうあかん。

信夫 先生。

コスギ …。

信夫 先生。僕です。枚方西校でお世話になった中野信夫です。

コスギは驚く。信夫に封筒を差し出す。

コスギ これで専門学校に行け。

信夫 え、

コスギ これからは福祉の時代や。落合の息子じゃないぞ。福祉と中国の時代や。これで福祉の資格を取れ。

信夫 先生もがんばりましょうよ。

コスギ お前ががんばれ。まだなんとかなる。いいか、なんか資格を取るんやぞ。

信夫 先生もがんばりましょうよ。

コスギ お前は忘れたんか。オープン戦で村田兆治が松井にホームラン打たれた姿を。

信夫 古いですよ。

コスギ 先生は今からゆっくりフィードアウトしていく。だからあんまりがんばれとか言ってくるな。

信夫 先生だってまだ若いじゃないですか。

コスギ もう、若いとか嫌いやねん。だってしんどいだけやもん。

信夫 先生、

コスギ いいか、これで人生立て直すんやぞ。

信夫 はい。

コスギは店を出る。

コスギ ありがとう。

コスギ去る。

信夫が封筒を開けるとそこには一万円札がいくつか入ってる。

——この時信夫の脳裏にかけてバイト先の店長から聞かされた話が浮かぶ。

「プロジェクター」 店長・「中野くんは風俗とかいくの？」

信夫・「いかないっすよ」

店長・「どうして」

信夫・「だって女性をお金で買うってなんか抵抗ありますもん」

店長・「その言い方がだめなんだよ。風俗店を「利用する」って考え

「いいじゃんよ」

信夫・「利用、ですか？」

店長・「そう。ほとんど仕方なくいくわけじゃない。あーゆうのって

すくなくとも楽しいとこじゃないよね。必要があつていくとこだ

から、利用するって考えて「らんよ」

信夫・「なるほど」

店長・「僕はよく利用させてもらってるよ」

信夫はお金をじっと見詰め決意する。

「プロジェクター」 性病になって、実家に帰った。

朗読にあわせてクロスたちが動く。

朗読(男)

御釜半蔵は沢井さんを見て「やっぱり」と思った。

御釜半蔵は団地の住人ではなく、団地の裏に広がる農家の人である。御釜家は代々この辺りの地主で、この団地も二十年ほど前までは御釜家の土地だった。御釜半蔵は土地を売ることに反対していたが当時すでに引退しており、息子が売ることを止めることはできなかった。御釜家には莫大なお金が入り込んだが御釜半蔵はご先祖様に申し訳がたんと悲しんだ。土地を売った翌年、御釜半蔵は市長選挙に立候補する。日々増加する新しい枚方市民に対して、先祖代々の土地に住むものとしていろいろ言っておきたいことがある。特に自然の保護。増え続ける宅地建設に何らかの規制をかけねばならない。けれど御釜半蔵の得票数はびつくりするほど少なく、御釜半蔵は落胆する。次の選挙も、次の選挙も、選挙と名がつくものならなんでも立候補してみるがいずれも落選。苦悩の中、御釜半蔵は気がついた、「そうか！枚方にはチンダレが必要だ！」。人が尋ねる、「チンダレってなんですか？」「チンダレはミンダレからできている。」「…ミンダレってなんですか？」「ミンダレはカンダレになる前のチンダレだ。」「カンダレって、「カンダレはユンダレとチチダレをあわせてできたものだ！」。御釜半蔵にはすべてわかった。ここ二十年ヒラカタで増え続けるあらゆる不吉なこと、交通事故も子供のいじめも大人のいじめもなくなりゆく自然もすべてこの町にチンダレが不足していることが原因なのだ。「人の心にチンダレを」。

そういつて御釜半蔵は団地中を歩く。チンダレおじさんと呼ばれるようになる。

朗読にあわせ「沢井かづえ」が歩く。

朗読(女)

御釜半蔵は目の前に現れた沢井さんを見て自分の正しさがこれで証明されたと狂喜する。なぜなら今目の前にある物体こそ、この町からチンダレがなくなった証拠であるからだ。人間は人間であるから鶏や魚ではないから人前で内臓は出さない。それは常識であるはずだ。だが見よ。チンダレをなくしたこの町では人は昼間から内臓を出して歩く。いかにチンダレが大切なものであるか、これを見てわからん者はおるまい！

「ほらみる！ほらみる！」

沢井さんの周りで御釜半蔵は大声を上げる。

大勢の人がこちらを向く。

「ほらみる！ほらみる！」

人々は集まった。大声を上げる老人と血まみれの少女のまわりに。

SCC ⑫ トリの話④

耳

サカナはイトクズにおびえつかまれた手を振り解く。

イトクズ 愛してる。

きみのこと愛してる。

初めてきみを見たとき、新鮮なチンゲン菜の真っ白い茎の部分かと思ったよ。みずみずしくて生命力にあふれている。タイプだ。好みだ。生きててよかった！

イトクズは悲しい顔をしてサカナを追い詰める。

イトクズ 愛！ 愛！ 愛！ 男女の愛！ きみは知っているかい？ 愛し合う喜び！

(大声で) 聞こえる？

サカナは脅える。~~サカナは脅える。~~

イトクズ きみはどんなタイプの男が好きだね。ふっくんか？ かーくんか？ ミーくんか？ 大人はどうだ。いぶし銀の大人だ。悩みはなんだ。悩みを言ってごらん。どんな悩みでも即座に答える。あきらめろ！ どうだ面白いだろう。私は面白いよ。暇がある」と駄洒落を考える。ひょうきんものなんだ私は。最近おなかの調子が悪くて何べんもナンベン。面白いだろう。

小娘！

時間がないんだよ。もうすぐここにも風が吹き始める。愛が必要なんだ。愛だ、愛！ 愛！ 私はやさしいよ。腕枕してあげよう。そしたら愛だって生まれてくるさ。こっちへ来い。サカナ、腕枕してあげよう。さあ、こっちへおいで。

サカナは~~サカナは~~遠ざかる。

イトクズ こないなら こちらがいこう ホトトギス！

イトクズはサカナを追い詰める。サカナは逃げる。

イトクズはサカナの手をつかむ。

サカナは必死の抵抗を試みる。

イトクズ …ごめんね。

サカナはイトクズのほほをはる。

イトクズ 「愛」らしくなってきたぞ！

イトクズはサカナを張り切って押し倒す。

老体ながらもイトクズは頑張る。

彼を突き動かすのは性欲でなく義務である。

やがて風の吹く音が聞こえてくる。イトクズはその音にびっくりしてサカナを襲う手が止まる。

「プロジェクター」 「風だ…風の音がする」

サカナはその間にトリカゴをもって逃げる。

少しためらった後、扉を開け外に逃げる。

イトクズもそれを追う。~~はサカナを連れかけ~~

SC ⑬ 団地の風景（実家でオナニー）

信夫はベランダから夕暮れの団地を見ている。

そこには「ごはんやでー」と大声を上げながら歩く母親たの姿がある。

舞台の外側よりクロスたちが以下の母の声と父の声を演じる。

信夫の母の声 信夫、ごはんやで！

信夫の父の声 食わすな！

信夫の母の声 お父さん、何言うてんのよ。

信夫の父の声 うちはお公家さんの家とちゃうぞ！

信夫の母の声 食べな死んでしまうやないの。

信夫の父の声 おまえがそんな風に…

母と父の声は小さくなる。

信夫はベランダから自分の部屋に入る。

母と父の言い争い、声が小さくなる。

信夫は手紙を開く。

舞台上に勝頼現る。

手紙（勝頼）

信夫元気か？

俺は元気だ。俺は今東京にいる。東京でアダルトビデオを

つくってる。大学を卒業して一旦はカード会社に就職したけど、むなしくてな。半年で辞めたよ。俺が理想としてるのはがむしゃらになれること、お前は俺のことをもしかしたらクールな男だとか思ってたかもしれないけど、違うんだ。俺は燃えたいんだ。馬鹿になりたいんだ。頭と体をフルにつかって世の中に「これでどうだ！」ってたたきつけてやりたいんだ。そんな仕事をしたいんだ。いまの日本でそんな仕事を見つけることは難しいよ。日本という国自体がもうお年寄りで、人の心もびっくりするほど保守的になってるからね。でも、性欲は違う。性欲と食欲が一番確かなものだ。おれがカード会社を辞めたのも、もっと確かなものを相手にして商売をしたかったからだ。俺は東京に出て、アダルトビデオの会社に入った。最初の二ヶ月ほどはほんとにきつかったけど、やりがいあるよ。プロ意識の高い現場はめちゃくちゃつかれるけど、そのぶん空気がいいんだ。「我欲」ってわかるか？ 我の欲で「我欲」。現場で監督が叫ぶんだ、「我欲」「我欲」「我欲」って。俺、好きだなこの言葉。

この世界はやる気さえあれば出世は早くて（つまり人の出入りがそれだけ激しいってことだけ）、俺はいくつか企画書を書いて、今度それが撮影されて発売されるんで一本お前に贈るよ。セルビデオだからわざわざ買ってもらうのも気が引けるしな。監督名のところに「卑怯」ってクレジットされてるだろ、それが俺のこと。本名でやらないのはこの仕事を恥ずかしがってとか、自信がなくてとかそーゆうことではないよ。自分の我欲は何か、突き詰めた結果がこうなんだ。「卑怯」。いい名前だと思ってる。じゃあいいシコシコを！ チャオ！

勝頼去る。

信夫の母の声 昔と違うんから、

信夫の父の声 違うことあるかい。男が二十もすぎて、

信夫の母の声 あの子は時間がかかるコなの。

信夫の父の声 かかりすぎや、だいたい…

母と父の声は小さくなる。

信夫はビデオをデッキに入れる。

プロジェクターにビルの屋上が映る。

そこに自殺を決意した女がいる。

その女を拝んでいる数人の男がいる。そして「どうせ死ぬならさせてくれ」とタ
イトルがクレジットされる。プロジェクターはフェイドアウトしてゆく。

舞台にはブリーフ姿の勝頼があらわれハンディカムのカメラをもってカマドウマ
のように跳ね回る。と同時に信夫はオナニーを始める。

勝頼 オオオオオ我欲、オオオオオ我欲、オオオオオ我欲！ お前のオオオオオ我欲はなんや、見せろ見せ

ろ！ もっと脱いで、もっ

と脱いで、もっと脱いで！ まだまだ隠してる！ 我欲我欲！！ お前の欲はなんや！

おまえの欲！ お前には名前もない、お前は肉、肉肉肉肉！ 我欲オオオオオや、全部許し

たる、

全部許したる、全部、全部許したる何でもありだ。狂っちゃえ！

（以下オオオオオを繰り返し述す）

信夫は射精をする。精子が自分の顔にかかってしまう。

信夫 うわ、

勝頼去る。

信夫はティッシュで顔を拭く。

~~ま、びゾオを止めぬ~~

信夫の母の声 そんなこと言うたかてあんたの子供やないの。

信夫の父の声 うるさいわい。

信夫の母の声 うるさいちゃうでしょ、自分の子供やないの。

信夫をオナニーの後始末をする。

特に顔は入念に拭くがきれいになった気がしなく何度も拭く。

信夫の母の声 あの子かてちゃんと考えてます。私からちゃんと言ってます。

信夫の父の声 男がな、

信夫の母の声 オトコオトコ言うたかてしやーないやないの、あの子はあの子なんやから。

信夫の父の声 勝手にせい。

信夫の母の声 いままでかてずっと私まかせでやってきたんやないの。

信夫の父の声 それでこんななったんやないか。

信夫の母の声 今さら口出しせんといてちようだい。

信夫の父の声 お前な、

信夫は部屋を出る。

信夫の母の声 あ、のぶ、ごはんやで。

信夫 いらん。

信夫の父の声 こら！信夫！

信夫の母の声 もうやめて……。

父と母の言い争いはより激しく続けられる。

信夫は洗面台でひたすら顔を洗う。

精子のついた部分をひたすらこする。

SC⑭ 求める⑤

朗読にあわせクロスたちが動く。カサネの群れ

朗読（女） 十二時十八分。走り出した沢井良子は団地の広場の入り口に人だかりを見つ

ける。黒い水が胸の辺りにたまって、それが沢井良子を息苦しくさせる。

見なくてはならない。人だかりに入り込まなくてはならない。背中を押されるように沢

井良子は人の群れに割り込み、そこで娘の姿を見た。

沢井かづえはまだ歩いていた。事故から二十六分たっていた。現場からは百五十メートルほど離れていた。人だかりは十五人ほどだった。半数は主婦で子供を抱いた人もいた。残りは団地に来たセールスマンや何かの勧誘に来たおばさん、パジャマ姿のおじさん、清掃局の人たちだった。みな沢井かづえからきつちり三メートル離れて円を描き、「ほらみる！ほらみる！」と叫ぶ老人御釜半蔵だけがその円の内側にいた。「あまりに天気がよすぎたから」とそのとき人だかりにいた主婦は後で言った。「あまりに天気よかったから、ぼーっとしちゃって」

「救急車！」

人だかりの中に入り込み娘を見つけた沢井良子はそう叫んだ。何人かパッと目を覚ましたように慌てだし電話に急いだ。沢井良子は娘の右ひざがわずかにつながっているだけなのに気がつき、娘を自分の背中に担ごうとした。

「ほらみる！ほらみる！」

沢井良子は絡みついてくる御釜半蔵をひじで払いのける。それでも何か言おうとする御釜半蔵の顔面を殴りつけた。入れ歯が奥にずれ沢井良子のこぶしは御釜半蔵の口に五センチほど入り込んだ。井のよりは背を丸めネビツのよの本声をだして御釜半蔵は抱れた。わずかに目を放した隙に沢井良子は娘が少しだけ移動していることに気がつく。団地の入り口のほうに目をやると血のあとが点々と続いている。

「なぜ？」

沢井良子は娘の足が向かう先を見た。

団地の中央に立つ塔の下。二人がけのベンチがあった。

||| S C ⑤ 煮えるヤング

信夫の部屋。信夫がいる。

スエット姿でぼさぼさの髪。高校時代に比べて十キロは太ったように見える。万年床の上でのたうつ。

備未はひとり胡坐をかいてちやちやを講やせぬ

コロスたち備未 いつかラスト五秒のカウントが

僕の耳にも届くだろう

そのときになってわかることもあるが

でも小まはまじいいた小

あんまりしゃべらないほうがいい

あんまりみないほうがいい

あんまりきにしないほうがいい

あんまりこだわらないほうがいい

あんまりあんまりあんまりあんまり

僕は孤独を味わうが

僕の孤独は親の経済力に支えられている

僕の考えは借り物でしゃべる言葉は手垢にまみれている

でも、~~いまはまあいいたい~~

あんまりしゃべらないほうがいい

あんまりみないほうがいい

あんまりきにしないほうがいい

あんまりこだわらないほうがいい

あんまりあんまりあんまりあんまり

~~踊らされる馬鹿がいます~~

~~踊らされる馬鹿を馬鹿にする馬鹿がいます~~

~~輪に入れない僕がいます~~

~~ただそれだけのことは~~

ぼくはいつまでもこだわっている

こだわっている

こだわっている

こだわっている

味覚は揚げ物に支配され

たまにキムチがおいしいだけ

どこかに、なつかしい

帰るべきふるさとがあるような気がして

でもそれも借り物

ぼくが考えたことじゃない

あんまりしゃべらないほうがいい

ぼくだけじゃないから

あんまりみないほうがいい

ぼくだけじゃないから

あんまりきにしないほうがいい

ぼくだけじゃないのに

すべての文学的思考を排除しなくてはならない

過剰なのはよせ

過剰なのはよせ

過剰なのはよせ

過剰なのはよせ

過剰なのはよせ

ラブ、アンド、ピース

ポップ！ポップ！

信夫は網の上のするめの様に苦しむ。そして備未は自分の腕をたたくテレビをつける。

信夫

今日もやしきたかじんが始まる。

ゲストは東京から山口もえちゃんです。

ざこばはよく水を飲む。

若手の漫才師はみんな同じような顔をしている。

ぼくは見ている。

外はまた一段と寒くなったようだ。

最近の子供の声がしない。

何度目の冬だろう。

二十七回目。

そのうち覚えている冬は、
かまくらをつくった。

スキーにいった。

バイトしてた。

バイトしてた。

バイトしてた。

それだけだ。

∴

違う。

∴

一緒に花の干草、いた。

ぼくは、一緒に花の干草、いた。

信夫は立ち上がる。

SC⑥ 歩行

§の⑥ トリの話 (風と太陽の光)

そこかしこに「風」が吹いている。太陽の光がところどころ差し込んでいる。

サカナはその中をトリカゴをもって走る。

二十メートルほど離れてイトクズがサカナを追いかける。

イトクズ 悪かった。私が悪かった。もう何もしないから。サカナ、もどってきてくれ！

イトクズはサカナを追いかける。何度かサカナの手をとるが振り払われる。サカ

ナはどンドン進んでゆく。イトクズは怖くて近づくことができない。

イトクズ もどれ！ もどるんだ！

§の① 二人がけのベンチ

朗読にあわせて信夫は動く。

朗読(男)

A号棟一のaに住む中野信夫は二年ぶりに玄関に立った。両親は驚いて声をかけた。ここ二年間息子は外出はもちろントイレとお風呂のとき以外自分の部屋から出ることは無かったからだ。

「どこに行くの」

母親がたずねる。

信夫は必死に答えた。体の水が濁ってしまつて、いくら思い出そうとしても顔が浮かんでこない。だからぼくは歩行することが肝心だ。体の水をこぼさないように大事に歩行すればその濁りも消えるんだ。

母親は涙を拭った。

父親はいらいらして台所から大声を上げた。

「勝手にしろ！」

中野信夫は外に出た。

信夫は歩く。その道はかつて沢井かづえが血を流し歩いた道で、向かうところは二人がけのベンチであった。

朗読にあわせコロスたちが「沢井良子」を演じる。

朗読(女)

沢井良子は娘を背負った。娘はうなだれて背中にもたれた。口から流れた血が沢井良子の肩にかかり、白い服に赤い線が入った。娘の身に何があったのかその時点で彼女は何も知らなかった。けれど娘が行きたいというなら行かせてやろうと思った。二人がけのベンチに。

朗読にあわせ信夫は動く。

朗読(男)

中野信夫は静かに歩行した。体の中にある水に波が立たないように。ゆっくりゆっくり歩行した。

イトクズ もどれ！ もどるんだサカナ。もう何もしないから。お互い理解するところから始めよう。いや、何も始まらなくていい。お願いだ。私はこう見えてもう年寄りなんだよ。だからサカナ、私より先に…

そのときイトクズの体を風が吹き抜ける。

イトクズは不安に襲われ自分を確認し始める。

イトクズ …腕、指、鼻、耳、口、肩、私、…私の記憶、イトマンくず雄、ててはちろくろく、イトマン正二、イトマンサチコの次男坊、私だ。カネマンミサと結婚、夫婦別姓。娘が一人。イトマンミカ。今日ここについた。昨日はサニーレタスを食べた。大丈夫、私だ。二日前は旅の最中だ。どこにも人はいなかった。「風」の音におびえてここまでやって来た。三日前もそう。四日前もそう。大丈夫、私だ。旅を始めたのは何年前？ そう二年ほど前のことだ。妻も娘も「風」に吹かれて死んでしまったからだ。私たちは「ハコ」に住んでいた。妻はベランダにプランターを置いた。パンジー、コスモス、スイートピー、朝顔、季節ごとにいろんな花がさいた。娘が幼かったころ、これも植えて

ほしいとシロツメ草をもつて来た。妻と娘はしやがみこんで水をやっていた。見てたんだよ私は。ちゃんと見てた。だから私はそこにいたはずだ。きつと、きつと、いたはずだ。あのベランダで私はよくタバコをすって妻と娘に嫌われたもんだ。私はそこから娘が自転車で「ハコ」の入り口から帰って来るのをよく見ていたんだ。見てたよ。だから、いたはずだ。…俺、いたかな。いたよ。え？ いたのか？ あれ？

二分、ちよいだ。

イトクズは倒れる。

朗読にあわせ信夫は動く。

朗読（男）

中野信夫は歩行した。体の水がだんだん透明になり始めた気がした。目を閉じてゆっくり呼吸した。十二年ぶりだった。ちょうど今ぐらいの時間だった。あのころと同じように自販機でジュースを買った。ファンタとコーンスープ。ベンチはまだそこにあった。

朗読にあわせ「沢井良子」が動く。

朗読（女）

沢井良子は娘に声をかける。もうすぐ、もうすぐ、もうすぐ、娘の体は軽かった。歩きたびに娘の鼻が沢井良子の肩にあたった。何度も力が抜けそうになった。夏の日差しで汗が目に入り視界が曇った。沢井良子はただひとつを見ていた。二人がけのベンチを。

サカナはイトクズの亡骸に近づく。トリが鳴き声を上げる。サカナがイトクズの亡骸に背を向け歩き出そうとしたとき、サカナの体を風が吹き抜ける。

信夫はベンチの手前で立ち止まる。

朗読(男)

中野信夫は描き始める。彼女の輪郭線から、頭の形、腕、指先、背中から肩にかけて、目、鼻、口、着ていた服、しゃべり方、中野信夫の目の前に彼女が映り始めた。

不安に襲われたサカナは自分を確認し始める。

サカナ …腕、足、おしり、肩、頭、指、鼻、耳、背中、口、目、歯、私、…今朝は豆を食べた。昨日も、その前も、ずっと前も、ずっとずっと前も、豆を食べた。私はいつからここにいたんだろう。何も憶えてない。だってここは私が知っているところと少しだけ違うから。お父さんのこともお母さんのこともいくら思い出そうとしても何も憶えてない。きっと私の体の水が濁っているから、そう思って何度も歩行してみたけど、浮かんでくるのは、

サカナと信夫 冬

風が吹いてる

二人がけのベンチ

夜遅くまで

僕らは話をした

サカナ 私、そこに、いた？

信夫 いた。きみはここに、いた。

サカナは信夫のほうに歩き出す。

けれどその途中で倒れてしまう。

このときサカナの手からトリカゴが離れる。

サカナが倒れたのはコロスの演じる「沢井良子」の腕の中。

朗読(女)

ベンチの手前にきて沢井良子は娘の心臓が止まっていることに気がついた。
娘を地面におろし、大声で叫んだ。

「かづえ！かづえ！かづえ！」

~~サカナはゆっくり地面にたおれる~~

サカナ ……こわい。こわいよ…。

朗読(女)

沢井良子にははっきりそう聞こえた。

~~動かなくなつたサカナの手からトリカゴが落ちる~~

トリカゴからトリが飛び立つ。

呆然と立つ「沢井良子」の上空に鳥が飛ぶ。

信夫は彼女を思うことをやめ、ベンチに缶ジュースを置く。

朗読(男)

置いておいたコーンスープの上に鳥が止まった。鳥は怖がりもせず中野信夫をからかうように跳ねた。

信夫が鳥に手を伸ばすと鳥は飛び立ってしまふ。

信夫

~~いるいるあつたけど、ぜんぜんかわやちやいないよ~~

朗読(男)

悔しくて仕方が無かつた。

信夫は再び歩き始める。

その足取りは少しだけ力強いものになっている。

けれど舞台にはサカナの死体がずっと転がったままだ。

暗転。

エピローグ その後

町を歩く

エピソード⑤熱帯魚

朗読にあわせコロスたちが動く。

朗読(男) エピソード⑤熱帯魚

G号等四のbに住む沢井良子はその後、家にこもりがちになった。ある日夫は熱帯魚を買ってきた。ペットの飼えないこの団地では熱帯魚を飼う人は多かった。夫婦はダイニングのサイドテーブルの上に水槽を置いた。静かになった食卓に水槽の酸素を起こすモーターの音だけが響いていた。食事のとき夫が言った。

「魚にはまぶたがないね」

だとすれば魚は眠らないのだろうか。魚は夢を見ないのだろうか。

「これ以上しんどいのは嫌だからな」

「…うん」

夫婦の会話はこれで終わった。

次の日。夫が帰って来るとそこに沢井良子はいなかった。夫は半分は覚悟準備して

いた。外で子供たちがボール遊びをしている。ボールがアスファルトに、カベに、打ち付けられる音が聞こえている。
やがて夫も家を出た。

水槽と魚、家族の記憶だけが残された。

熱帯魚だけが残された

モーターの音が響く。

糸くずが一つ水槽に落ちる。

舞台には数名のコロス演じる「沢井良子」が大きな荷物を抱え立っている。やがて電車の近づく音がしてスローモーションでそれに乗り込む。

朗読（男女）

==== 汽車が終点についたら

そこからまた線路が続いて

私はまたキップを買って終点をめざす

汽車が終点についたら

そこからまた線路が続いて

私はまたキップを買って終点をめざす

そしてそれぞれの駅から

それぞれの町は広がって

人が、人が生活をしている

そんな無数の町の

そんな無数の駅の

プラットホームの端に

娘を死なせた母親が大きな荷物を抱えて立っている

どこの町の

どこの駅にも

プラットホームの端に

娘を死なせた母親が立っている

母親が立っている

おわり